２０２５年1月５日（日）　　於札幌発寒教会

金持ちとラザロ

（ルカによる福音書１６：１９～３１、ミカ書６：６～８）

今朝は、ルカによる福音書１６章１９節から３１節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「金持ちとラザロ」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。説教題も、“小見出し”そのままを用いることに致しました。それが一番分かり易いのではないか、と考えたからです。ところで、この譬え話は、主イエスがここで、前後の脈絡もなしに、唐突に、話し出されたものではなく、これまでの記事との深い関わりの中で、語られたものなのです。主イエスは、ルカによる福音書１６章に入るや、先ず、「『不正な管理人』のたとえ」を語られました。そこで主イエスは、「不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、永遠の住まいに迎え入れてもらえる」（９節）と、説かれました。この言葉の意味する所は、この世に生きている間に、貧しい者を憐れみ、施しをしておけば、死んだ後、彼らが神の前で、「あの人は善い人だった」と言ってくれ、「どうか救ってあげてください」と、神に執り成し、その結果、永遠の住まいに迎え入れられることになるであろう、と、言うことなのですが、これを立ち聞きしていた金に執着するファリサイ派の人々が、皮肉な笑いを浮かべ、何と馬鹿なことを言う男か、と、あざ笑ったのに対し、それへの返答の意味で、語られたのが、今日の、この「金持ちとラザロ」の譬え話だったのです。

これは、飽く迄も、譬え話であって、神学を語るものでも、死後の世界に関するキリスト教の教義を述べたものでもありません。既に、この時代ユダヤ人の間には、これに似た話が広く語り継がれていました。遡れば、それはエジプトに起源があるようなのですが、主イエスは、それを用い、独自の譬え話に作り替えて、金に執着し、一切貧しい者に憐みを示さないファリサイ派の人々を諭されたのです。しかし、譬え話とは言っても、それは、実に、霊味豊かな、聞く者が聞けば、その人生を一変させるような、強いインパクトを与える譬え話です。現に、あのアフリカの聖者と称えられたアルベルト・シュヴァイツァー（１８７５～１９６５）を突き動かし、すべてを捨ててアフリカに赴かせたのは、外でもない、この「金持ちとラザロ」の譬え話だったのです。彼は、金持ちをヨーロッパ、或いは、ヨーロッパ人と、ラザロをアフリカ、或いは、アフリカ人と捉えたのです。そして、居ても立ってもおられず、医師となって、アフリカに赴くのです。その時、彼は、既に、神学者として世界的に名声を博し、また、オルガン奏者としても、一家を成していました。それを、医師となるべく、自分が勤めていた大学で、一学生となって、医学を学び、医師の資格を取った後、アフリカに出掛け、赤道アフリカ・ガボン共和国のランバレネで、病院を開き、病に苦しむ現地の人々の治療に当たったのです。彼は、ドイツ人でした。ドイツは、第一次世界大戦、第二次世界大戦、いずれに於いても、敗戦国となりましたから、そのため、大変な辛酸を舐めるのですが、それだけに、平和に寄せる思いは深く、特に、核戦争への強い警告を世界に向けて発し続け、１９５３（昭和２８）年、その働きが評価され、ノーベル平和賞を授与されています。その生涯は、９０年に及びました。が、終焉の地は、母国のドイツではなく、彼が、愛情を傾けて働き続けたランバレネでした。この事実は、「金持ちとラザロ」の譬え話が、彼に、如何ほどの影響を与えたか、その影響力の深さを、自ずから物語る出来事として、捉えることができるのではないでしょうか。

少し、序の部分が長くなりましたが、ここで譬え話そのものの学びに入ってまいりたいと思います。金持ちとラザロは、実に対照的です。生前、金持ちは、「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」と言います。これに対し、貧しいラザロは、彼の門前に横たわり、毎日物乞いをして、特に、金持ちの家から出る残飯にありつけることを期待して、その日暮らしをしていました。彼は、全身できもので覆われ、当時犬は不浄な動物とされていたのですが、その犬までが来て、彼のできものを舐める始末で、正に、犬にまでも侮られ、舐められる程の存在だったのです。やがて彼は死にました。でも、彼は天使によって運ばれ、天国で催されている宴会の、その一等席と言ってもよいアブラハムの直そばの席に就けられました。彼を追うようにして、金持ちもまた死にました。死は平等です。貧しい者にも、金持ちにも、必ず何時かやって来るのです。誰も、これを避けることはできません。金も、地位も、名誉も、血統も、死の前には、全く無力なのです。但し、葬儀は、金持ちの場合、まだ金に物を言わせ、盛大に行われます。でも、金の威力を見せ付けられるのはそこまでで、後の世のことまで、金は保証してはくれません。この譬え話の金持ちの場合、陰府で苛まれることになりました。彼は遠くから、天国の宴席で、アブラハムとその直ぐ傍にいるラザロとを見ると、「大声で、『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水で浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます』」と訴えました。彼は、盛大な葬儀とは裏腹に、死後、地獄に落ちたのです。そして、そこで、火炎によって炙られる責め苦に遭うことになったのです。

地上の人生は、それで完結するものではないのです。それは、第一幕に過ぎず、死後、第二幕目が始まるのです。そちらの方が、ずっと永いのです。何せ、永遠に続くのですから。しかも、そこでは、自分が地上で蒔いたものを、自分で刈り取ることになるのです。ですから、誰にも文句が言えません。言ってみれば、「自業自得」、「身から出た錆」なのです。今となっては、後悔で、ただ臍（ほぞ）を噛む以外ないのです。この譬えの金持ちも、そのことは重々承知していたはずです。でも、やっぱり、そうとは思いつつも、苦しさの余り、訴えざるを得なかったのです。

彼は、自分の願いが叶わぬと知ると、今度はしおらしく、まだ地上に残る兄弟たちのことを思い、その将来を案じて、アブラハムに訴えました。「父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることがないように、よく言い聞かせてください」と。彼は、死者の世界から誰かが甦って、死後の世界がどんなものか、懇々と言って聞かせれば、きっと彼らは、悔い改めるだろう、と、そう思ったのです。しかし、アブラハムは、彼に、こう答えるのです。「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」と。そして、更に、「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れないだろう」と。何とも、つれない返答のように聞こえますが、しかし、それが、人間の紛れもない現実なのです。

現に、ヨハネによる福音書１１章に、マルタ、マリアの弟で、同名のラザロが、主イエスによって死人の中から甦らされた、と言う記事が出て来ます。その結果、何が起こったかと言うと、こんな噂が広がれば大変だ、と言うことで、ユダヤ議会では、イエス殺害が決議されるのです。主イエスの復活の際にも、決して信じた者は多くはなく、寧ろ、多くのユダヤ人は、信じるどころか、却って、強い反感を抱いたのです。ルカによる福音書の２４章に、エマオ途上で、復活のイエスが、ユダヤ人たちを恐れて、都を落ち延びるクレオパを含む二人の弟子たちに現れ、歩みを共にしつつ、中々イエスの復活を信じようとし

ない彼らに、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明されました」（同２７節）。復活のイエスが目の前におられても、やっぱり、モーセと預言者、つまり、旧約聖書、当時は、まだ旧約聖書しかありませんでしたから、聖書と言えば、旧約聖書となるのですが、今ならば、旧約、新約を含めた聖書全体を指す、と捉えて間違いないのですが、兎に角、聖書に聞かずに、直接復活のイエスに出会ったからと言って、信じられるわけではないのです。況してや、この譬え話のラザロが死者の中から甦って、金持ちの兄弟たちに、死後の世界について語ったとしても、悔い改めなど、殆ど、期待はできないのです。アブラハムが言うように、聖書に聞く以外に、どんな近道もないのです。

ヘブライ人への手紙９章２７節に、「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」とあり、更には、順序は前後しますが、同じヘブライ人への手紙４章１３節には、「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」とあって、生きている間は、あれこれ言い訳や、誤魔化しができても、死後の世界に於いては、一切の小細工は、最早、用をなさなくなってしまうのです。譬え話の金持ちも、いよいよ追い詰められて行きます。

今日は聖書朗読の折り、旧約聖書からはミカ書６章６節から８節までが読まれました。あそこの８節には、こう述べられていました。「人よ、何が善であり　主が何をお前に求めておられるかは　お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し　へりくだって神と共に歩むこと、これである」と。譬え話の金持ちも、この預言者ミカの言葉は、知っていたはずです。主イエスは、この譬え話を、金に執着するファリサイ派の人に対してなさったのですから、この金持ちとは、ファリサイ派の人を指しているのは明らかで、ならば尚のこと、彼らが、日頃からモーセと預言者に馴染んでいたのは事実であって、それこそ、預言者ミカの言葉など、諳（そら）んじていたことでしょう。でも、聖書の言葉を知っている、と言うことと、それを行う、と言うこととは、彼らの場合、全く別の事柄だったのです。彼が、地上にあった時の生活振りは、とても、預言者ミカが、これぞ主なる神が求められること、として説いた、「正義を行い、慈しみを愛し　へりくだって神と共に歩む」などと、言えるものではありませんでした。彼にとって、決定的な欠陥は、憐れみの欠片（かけら）もない事でした。金が、彼の心を干上がらせ、血も涙もない石の心に変えてしまったのです。死後の世界に於いて、それが、問われることになったのです。

では、ラザロの場合は、どうだったのでしょうか。アブラハムは、地獄で苦しむ金持ちに対して、「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで慰められ、お前はもだえ苦しむのだ」と言い、立場の逆転は、何も不思議ではなく、理の当然であるかのように語るのですが、では一体、ラザロは、どうして死後、幸いに与ることができたのでしょうか。生前、彼は、何か、目に見えない所で、神の前に、称賛されるようなことをしたのでしょうか。特別、そんなことがあったとは、どこにも書いてありません。それを臭わせるようなことも、何も書いてありません。では死後、金持ちとラザロとの間にできた大きな隔たりは、何によったのでしょうか。ただ、単純に、それこそ機械的に、生前の立場は、死後は、逆転する、と言う、これは、それだけの教えなのでしょうか。秘密は、ラザロと言う名前にあります。金持ちには、名前はないのですが、極貧の中に生きたラザロには、名があるのです。ラザロとは、ヘブル語の“エレアザル”のギリシャ語音訳された名前で、その意味は、“神は助けたもう”です。何も持たなかったラザロは、神以外に助けを求め得るもの

はなかったのです。ラザロと言う名は、彼の人となりの象徴なのです。彼にとっては、ただ神だけが、唯一の助けだったのです。そして、彼の神への信頼は、間違いがありませんでした。地上では、それは空しく思われました。でも、神は、彼の信頼に、最後には、応えられたのです。それが、永遠の慰めであり、アブラハムの懐に憩うことだったのです。金持ちは、金に信頼し、最早、神を助けとする必要を感じなくなりました。でも、人生には、第二幕目があったのです。彼は、それを忘れていました。その時になって、慌てて、神に助けを求めても、最早、時既に遅し、と言うことになってしまったのです。この譬えの警告は、ここにある、と、そう言ってよいのではないでしょうか。

箴言３０章７節以下に、こう言う祈りの言葉が出て来ます。「二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまで、それを拒まないでください。むなしいもの、偽りの言葉を　わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず　わたしのために定められたパンで　わたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り　主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き　わたしの神の御名を汚しかねません」。これは人間の弱さを知り抜いた、旧約の知者の切実な祈りです。

主イエスがなさった「『金持ちとラザロ』の譬え」で、眠れる霊覚を呼び覚まされた私たちは、徒に、浮き足立つのではなく、落ち着いて、心穏やかに日常を生きるため、この旧約の知者の祈りを、心に留めることも、また、必要なのではないでしょうか。

（三輪恭嗣）